

＜ 吃音をもつ子どもの母親が抱く悩みと、必要とする ソーシャル・サポートに関する研究 ＞

研究期間 平成 29 年度～平成 年度

研究代表者名 吉田恵理子

共同研究者名 永峯卓也、菊池良和

I. はじめに

吃音とは、発語時の音の繰り返し(連発)や引き延ばし(伸発)などにより、滑らかに話すことが妨げられる障害である。2歳から4歳児の5%に吃音が発症すると言われており、幼児期に発症した吃音の80%は自然に消えるが、成人の1%は吃音があるとされている。また、吃音者の10人中4人は、吃音によりコミュニケーションが妨げられ、社会不安障害に陥ると報告されている。吃音という障害があっても、日常生活や社会生活を送る上で妨げとなる社会的障壁を取り除くために、社会や学校でできる限りの合理的配慮をすることが、障害者差別解消法で言われているが、十分な取り組みには至っていない。

子どもが障害を抱えた場合、主たる支援者は多くの場合母親である。共同研究者である、九州大学で吃音外来を担当する菊池医師の外来においても、大学生までの子のうち母親と来院する子どもが大半を占める。一方で、吃音に対し、「親のしつけが厳しいから」、「母親が原因」と過った認識をされることも多く、吃音をもつ子どもへの対応、周囲の声に思い悩む母親も少なくない。しかし、吃音の子供をもつ母親への支援は確立されていない。

また、これまで吃音をもつ子どもの母親の悩みに着目し、記述した研究はなく、吃音の子どもをもつ母親が、誰からどのようなサポートを受けているのか、また必要としているのかの体験は明らかにされていない。さらに、障害をもつ子どもの母親へのソーシャル・サポートの必要性は言われているが、吃音の子どもをもつ母親に対し、どのようなサポートが必要なのかは明らかでない。そこで、本研究は、吃音をもつ子どもの母親がどのような悩みを抱き、どのような支援を必要としているのかを明らかにすることを目的とし、当事者の声を反映させたソーシャル・サポート構築に向けた基礎的資料を得ることを成果目標とした。

II. 研究内容

1. 研究デザイン

質的帰納的研究。

2. 研究参加者

子どもが吃音をもつ母親 15 名。

3. データ収集期間

平成 29 年 11 月～平成 30 年 3 月

4. データ収集方法

対象者に文書と口頭で研究の主旨を説明し、同意書への署名にて同意の表明を確認し、半構造化面接を行った。面接は、個別または参加者の希望に応じグループで実施した。面接は対象者の希望する場所でプライバシーが守られるように配慮して行った。面接内容は、対象者の了解を得て IC レコーダに録音した。

インタビューの内容は、「子どもが吃音を持つことで経験した周囲の対応」、「悩んだこと」、「子どもにとって役に立った配慮」、「子どもにとって役に立たなかった、または迷惑だった配慮」、「その時にどのような支援があったらよかったか」、「あなたが考える合理的配慮とは」などでありインタビュー時間は 30 分程度とした。また、同意が得られた参加者には、データの真実性を確保するため、テープ起こしをした段階で再度面談または、データを渡し、語られた内容に誤りがないか、追加がないかを確認してもらった。

5. 分析方法

内容分析を行った。

- 1) 面接時に録音した内容とメモから、対象ごとに逐語録を作成した。
- 2) 作成した逐語録の内容を全体の意味が理解できるまで熟読した。
- 3) 対象者が語った内容から、「吃音をもつ子どもの母親が抱えている悩み」と、「どのような支援を必要と感じているのか」に関連する内容について語られた部分を抽出した。
- 4) 抽出した文章をまとまりのある意味ごとに区切り、コード化を行った。
- 5) 抽出したコードを意味・内容が類似しているもので整理しグループを作成した。

III. 倫理的配慮

本研究を始める前に、対象者に対して、研究目的・方法、参加は自由意思であり拒否や辞退による不利益は生じないこと（研究への協力の任意性および撤回の自由）、研究協力に伴う負担並びに予測されるリスクおよび利益、個人情報取り扱い、研究成果の公表について説明した。また、研究終了後はレコーダを含め研究資料は施錠できる書庫に 5 年間保管後レコーダの内容は削除し、逐語録にしたデータおよび紙面の分析結果はシュレッターで破棄することを合わせて説明し、書面にて同意を得た。

IV. 結果

1. 研究参加者

研究参加者は 15 名であった。しかし、逐語録確認の段階で 1 名からの研究参加への辞退があり、分析対象は 14 名であった。内訳は幼稚園児の母親 1 名、小学校 1 から 3 年生の母親 2 名、小学校 4 年～6 年生の母親 3 名、中学生の母親 2 名、高校生の母親 4

名、大学および大学院生の母親 2 名であった。面接回数は 1 回の参加者 8 名、うち逐語録を確認してもらった参加者 5 名、面接を 2 回の実施した参加者 6 名であった。1 回の面接時間は、22～76 分であった。

2. 吃音をもつ子どもの母親が抱く悩み

吃音をもつ子どもの母親が抱く悩みは、＜小児科医師や保健師、教員に相談してもそのうち治ると言われる＞、＜指摘しないほうが良いと言われる＞、＜気にしないように言われる＞といった、【相談しても、治る・気にしないように言われる】、＜祖父母から愛情不足と言われる＞、＜友達にからかわれる＞、＜夫や身近な家族が分かってくれない＞といった【周囲の無理解】、＜大人になっても治らなかったことを考えると不安＞、＜将来が不安＞といった【大人になっても治らなかった場合の将来への不安】、＜忙しくて余裕がないと誤った支援をしている＞、＜正しい支援を知らず誤った支援をしてしまう＞といった【誤った支援をしてしまう】、＜自分の関わりが悪いのではないかという負い目＞＜あのころは取り戻せないという思い＞＜もっとはやく対応してほしかったと子供から言われる＞といった【自分の関わりや子供に対する負い目】、＜能力があっても進学や就職を躊躇せざるを得ない＞＜受験や就職が心配＞といった【吃音により能力が生かせないことへの不安】といった 6 つのグループが形成された。

具体的には、「おまえ何？そんなしゃべり方って真似されているところを、実際自分が見てしまうと、それがやっぱり一番つらかった。その時は知識もないし、お友達に自分が説明することもできず見ているだけしかできなかった。あのころは取り戻せない。子供に対して、吃音は母親のせいではないって言われても負い目を感じる自分がいる（A 氏）」、「祖父母から愛情不足と言われ、吃音になったのもあなたのせいって言われて、行き場がなくて家族の中でも孤立した感じになるけど、近くに同じ境遇の人もいないから誰に話しようもなかった。そうすると子供にも強く言ってしまった（D 氏）」と言った悩みが語られた。

3. 吃音をもつ子どもの母親が必要と感じている支援

吃音をもつ子どもの母親が必要としている支援は、【正しい吃音に対する理解】、【吃音に関する啓蒙活動】、【本音や同じような境遇で語り合える場・人】、【専門家の支援】、【将来に希望がもてるような情報】、【子供の成長とともに配慮される立場だけでなく段階的に支援者としての役割に移行できるような支援】の 6 つのグループが抽出された。

V. 考察

吃音者をもつ子どもの母親は、【相談しても、治る・気にしないように言われる】、【周囲の無理解】、【大人になっても治らなかった場合の将来への不安】、【誤った支援をしてしまう】、【自分の関わりや子供に対する負い目】、【吃音により能力が生かせないことへの不安】といった悩みを抱いていた。

伊藤（2005）は、「吃音がある状況のままで」より良く生きることを志向するという考え方をもつことが必要であると述べている。しかし、吃音者をもつ子どもの母親は、吃音の症状が環境や体調によって強く出たり、ほとんど出なかったりすることにより、理解はしていても、【自分の関わりや子供に対する負い目】を抱えており、治ってほしいという思いを抱いている。子供が吃音を受け入れていくと同様、母親も「吃音がある状況のままで」より良く生きることを受け入れていく必要がある。また、母親が必要としている支援として、【正しい吃音に対する理解】、【本音や同じような境遇で語り合える場・人】、【専門家の支援】という支援が導き出された。三浦ら（2010）は、筋ジストロフィー患者の親におけるソーシャルサポートとメンタルヘルスの関係について、母親の場合、配偶者および家族からのソーシャルサポートは心理的ストレス反応を軽減し、家族、医療関係者、仲間からのソーシャルサポートはポジティブ思考を高めると述べている。吃音当事者には、『言友会』というセルフヘルプグループが存在するが、吃音の子どもを持つ母親は、支援者でもあると同時に、自らが悩み、サポートを必要とする当事者でもある。周囲が正しい知識をもつための啓蒙活動や、母親同士のピアサポートが行える場の必要性が示唆された。

近年、自らも発達障害のある子育てを経験し、かつ相談支援に関する一定のトレーニングを受けた親の活動を支援するペアレント・メンターが厚生労働省においても有効な家族支援システムとして推奨されている。吃音の母親への支援も、今後、ペアレント・メンターという視点も取り入れながら、取り組んでいく必要があると考える。

参考文献

- ・水町俊郎・伊藤伸二編, 伊藤伸二： 吃音はマイナス面のみかー吃音力の提唱ー。 治すことにこだわらない吃音とのつき合い方。 p 103-122ナカニシヤ出版, 2005
- ・三浦正江、新村典子：筋ジストロフィー患者の親におけるソーシャルサポートとメンタルヘルスの関係について, *Japanese Journal of Counseling Science*, 43, p 1-11, 2010
- ・ペアレントメンター 日本ペアレントメンター研究会
<https://parentmentor.jp/general/parent-mentor> (参照2018. 4. 10)